第３回　経済と流通の基礎

経済の仕組みとビジネス

執筆・講師　粕谷和生
城西大学経営学部特任教授

学習のねらい

「経済」と聞くと、難しいというイメージを持つ人が多いようですが、経済は私たちにとってとても身近なものです。私たちは、ものやサービスを消費して生活していますが、その消費は生産と流通によって支えられています。つまり生産、流通、消費というつながりで、この一連のつながりを「経済」といいます。だから、経済は身近なものなのです。

今回は「経済の仕組み」について学びます。まず、経済活動を行う経済主体について、次に経済活動を行う際に重要な考え方である希少性とトレード・オフについて学びます。さらに、「経済の仕組み」の中で価格はどのように決まるのか、また、どのように変動するのかについても見てみましょう。

今回の重要キーワード　**経済主体／生産要素／希少性／トレード・オフ／機会費用／価格／需要／供給／均衡価格**

Point 1　経済の主体とその活動

生産、流通、消費の一連のつながりを経済といい、経済活動を行う主体を**経済主体**といいます。経済主体は、国の経済の場合は三つあり、家計、企業、政府がそれにあたります。

家計は私たちの家庭を、消費を行う経済主体としてとらえたもので、家庭では家族の誰かが企業や政府に労働力を提供し、賃金という収入を得ています。その収入で企業から商品を購入し、消費して生活しています。企業は、家計から労働力などの提供を受け、家計や政府に対して生産、流通のビジネスを行っています。政府は、家計や企業から税金を徴収して、教育や福祉などの公共サービスを提供したり、経済活動の調整などを行ったりしています。

Point 2　希少性とトレード・オフ

経済活動を行うためには、経済の基本的な考え方を身につけることが重要です。まず、商品を作るために必要な生産要素について学びましょう。**生産要素**とは、土地・資本・労働力の三つをいいます。まず、「土地」とは、工場や店舗などを建てる土地や農地のほか、鉱物や水などの天然資源全般をさします。次に「資本」とは、商品の生産に用いられる工場、機械、道具などです。「労働力」とは、商品を生産する従業員、経営者などです。

これらの生産要素には限りがあります。これを生産要素の**希少性**といいます。したがって、

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

ビジネスにおいては限りある生産要素をどのように、どれだけ使うかを常に考えて、よりよい案を選択しなければなりません。

この場合、どれか一つを選択すれば、他のものはあきらめなければならない状態、すなわち**トレード・オフ**の問題が生じます。例えば、若者向けの商品Ａを販売する案と、高齢者向けの商品Ｂを販売する案のどちらか一つを選択しなければならない場合です。また、新工場の建設予定地をＸ市、Ｙ市、Ｚ市のどこにするかなどの場合も、トレード・オフにあたります。番組では、猫本専門書店のトレード・オフを紹介します。

また、トレード・オフによって選択されなかった（あきらめた）案から得られたはずの価値を**機会費用**といいます。特にビジネスにおいては、この機会費用についても考えに入れて、より大きい利益を生み出す案を選択しなければなりません。

Point 3 価格の決定と変動の仕組み

商品の**価格**は**需要**と**供給**の関係で決まります。消費者は、商品をなるべく安く買いたいので、価格が安いほど需要量は増えていきます。したがって、需要曲線は左上から右下へ描かれます。一方、生産者はなるべく高く商品を売って利益を獲得したいので、価格が高いほど供給量は増えていきます。したがって、供給曲線は左下から右上へ描かれます。需要曲線と供給曲線の図は、番組の中で確認してください。

図の中で需要曲線と供給曲線が交わる箇所があります。ここは需要量と供給量が一致している点で均衡点といい、この点の価格を**均衡価格**といいます。均衡価格は、さまざまな要因で変動します。たとえば、天候不順という要因で野菜の収穫量が減ると、生産者が売りたいと考え、かつ売ることができる量が、すべての価格について少なくなります。そうすると供給曲線は左に移動します。一方、天候不順という要因は、消費者の需要には直接的な影響を与えませんから、需要曲線は元の位置のままで移動しません。このとき、均衡点は左上に移動します。よって均衡価格は上昇します。

番組では、都内のスーパーマーケットの社長に、価格の変動についてインタビューしています。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。